

小学生の部

2,245
作品

作文コンテスト 受賞作品

中学生の部

745
作品

★ ★
常任委員長賞

あいさつで笑顔に。

富士見台小学校
6年生 あだち ゆめ
定立 侑女さん



私は以前地いきの人とは、ほとんどしゃべりませんでした。地いきの人としゃべったことは数回程です。地いきの人としゃべれるには、どうすればいいのか私は地いきの人に声をかけてもらうたびに私は考えていました。みなさんはどう考えますか。私は先日地いきの人と積極的に話してよかったと思う体験をしました。

私は友達を作るのが得意な方だと思います。最初は少しとまどう部分もあるけれど話したらすぐ仲良くなれるので、仲いい友達がたくさんできます。ですが地いきの人とはあまりしゃべりません。朝のあいさつの

「おはようございます。」でも声をかけられないので地いきの人とあうときは無言で通りすぎていました。がんばって話そうとしてもなかなか声をかけられずいつのまにか人がいなくなってしまうということがよくありました。私の家の近くにはお店がたくさんあります。私の家も駐車場をやっていて特におばあちゃんは、いろんな人と関わりをもって地いきの人とも話すのが得意です。駐車代をはらいにきてくれた人と話しながら駐車代をもらったり、来てくれたお客さんともうまく話せます。他にもまわりにあるお店の人達も話すのが得意です。よく食べる料理屋の店主の方も話が上手で料理がおいしいのでとても人気のお店ですし、近くのたばこ屋さんの人もよくお客さんとしゃべっている姿を見かけるのでいつもすごいなと思っていました。私がしゃべってみようというきっかけをくれたのはよく遊んでいる友達でした。私がよく通る道にいつもきれいなバラをさかしているおうちがあるのですが私はいつもきれいだなと思っていました。ある日友達と一緒に家にかえると中にバラを育てている人に会いました。その人はバラを切っていました。友達が「あの切ってしまったバラがほしいな。」と言いました。すると、一人の友達がバラを育てている人

声をかけました。友達はいいいな言葉使いで「この切って地面におちているバラを少しもらっていいですか。」と聞くとその人は、「どうぞ、どうぞ。」と言ってバラをくれました。そしてなぜ切ってしまったのかという理由もとてもいいにおしえてくれました。私達がバラの花をひろっていると私達の近くを仲のいい老夫婦が「きれいなバラだね。」と言って通っていくのが聞こえました。私は、とてもいい気持ちになりました。帰ろうとした時に「きれいに咲いたところにまたおいで。少し切って分けてあげるよ。」と言ってくれました。私は地いきの人としゃべる大切さをその時学びました。大切さを知っても話すのはなかなかできませんでした。どう話せばいいのかなやんでいると、おばあちゃんの姿がうらびました。おばあちゃんは、地いきの人としゃべるときにだれもがわかる地いきの話題を出していたことを思い出しました。そんなことを考えていたら地いきの人としゃべれるような気がしてきました。次の時は私から積極的に声をかけていきたいと思います。私は社会を明るくするには地いきの人と声をかけあい、話していくことが大切だと気づきました。地いきの人達とかわりをもてば、こまった時に助けあえます。そして今回の事のように地いきの人達がいい気分になると自然と笑顔がふえ地いきが明るくなっていきます。話すのが苦手な人でもまわりにおてほんにできる人がいないか考えて、自分から積極的に話していくのが大切だと気づけるように、そんなきっかけを自分につくれるような、笑顔のあふれる地いきにしたいです。

★ ★
常任委員長賞

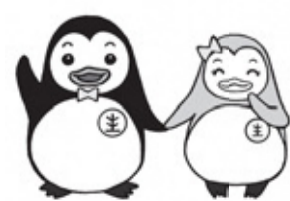
誰もが自信を持てる社会へ

駒込中学校
2年生 あきはた ひかる
秋畑 光さん



ペイ・フォワード。自分が受けた親切を、別の人へ贈っていくこと。何よりも「自分から先に」という意思が大切だ。ペイ・フォワードという言葉は映画のタイトルとしても使われている。映画の中で、この考え方は世界に広まり、心に傷を負った大人達の心を癒していく。また、あるホームレスは少年から温かい親切を受ける。その親切を別の人へ贈ろうとして、自殺を試みている人を助けたというエピソードも描かれている。一人が三人に、三人が九人に親切を贈る…。そうすれば、小さな一歩はやがて大きくなる。ところでつい最近、僕は「出所した人の再犯率が増加している。」とニュースで聞いた。再犯を起こしてしまう理由は何だろうか。まず再犯防止のために大切なのは仕事・住居・支える人と聞いた。しかし、今は彼らを受け入れるための社会の準備が充分ではないのが現状だ。更生し社会復帰を目指している人が冷たい現実と直面したら、居場所をなくし自暴自棄になってしまう。しかしこの悪循環を良い循環に変えることはできると思う。まずは僕達が、誰でも自信を持って生きていける社会を創り出すことだ。そうすれば再犯を防ぐことができるだけでなく、治安も良くなり誰もが安心して暮らしていける社会が実現できる。自らが先に行動し、彼らに親切を受け渡し、彼らはその親切を誰かに贈っていく…。すなわちペイ・フォワードできる環境が、良い未来を創造すると僕は信じている。僕は「再犯防止のために大切なもの」の一つである「支える人」に興味を持った。それが保護司という仕事である。罪を犯した人の改善及び更生を助けるのが主な仕事だ。僕が調べたある保護司の方は、対象者を絶対に孤独にさせないという強い思いがあり、それによって再犯も再非行も防いでいけると確信しているそうだ。僕は人のためにここまで

動くことができるこの保護司の信念と行動力に感動した。このように社会復帰に協力する仕事があることを知ったと同時に、この仕事の人手不足問題も知ることができた。保護司の数は平成二十二年以降、六年連続で減少している。さらに、急速な高齢化も進んでいるそうだ。皆と同じが良いとする日本人の考え方は、世界的に評価されている一方で、罪を犯した人への偏見が強いという側面もある。しかし、僕は過去だけに着目せず、今の姿を信じる社会であってほしいと思う。僕は今回をきっかけに、再犯のいさつや保護司の仕事に興味を持つ、知る、理解する、感動する、という行動をしたことで、もう偏見を持つことはないだろう。それは僕自身だけでなく、社会全体にも感じてほしい。また、社会に出ても受け入れられてもらえない冷たい世の中で、自分の居場所を失い、話してくれる人も誰もいない四面楚歌の状況で、再犯を起こしてしまう人の気持ちを少し理解することも大切だと思う。更生し、社会復帰を目指している人は、どんな社会を望むだろう。僕達は、罪を犯してしまった人に直接関われなくても、その人の居心地の良い社会創りに関わることはできると思う。そうすれば、自然と社会が明るくなるはずだ。どんなに小さなことでも、多くの人が行動すれば未来への影響力はとても大きくなる。そう、それが「ペイ・フォワード」。僕の理想の未来。



★ ★
優秀賞

スマホと利用者

駒込小学校
6年生 ほそかわ たいち
細川 大智さん

ドン。「痛えな。」「邪魔だな。」と言われたり、舌打ちされたり。「悪いのはそっちじゃないか。」と思ったりがみなさんはありますか。ぼくは何度もあります。それはながらスマホについてのことです。たとえば、電車でのことです。ぼくは電車に乗る時、必ず、もう降りる人はいないか、ということを確認してから乗っています。でも、さあ乗ろうという時に、スマホをいじりながら、のろのろと歩いて降りて来る人がいます。ぼくはそんな人とぶつかった経験があり、先ほど言ったような理不尽なことを言われ、何も言い返せずに終わってしまうことがありました。その度にすごく嫌な気持ちになります。また、電車の中で、人の迷惑も考えず、せまいスペースですずと指を動かしてゲームをしている人がいます。両手をはなしているため、電車がゆれた時に他の人にぶつかり、あやまりもせず、不快な思いをさせている人がいます。この二つの問題は、大きな事故や相手にけがをさせてしまうことも考えられます。この小さく見えて、大きな問題を解消できるのではないかと考えました。もちろん、人々の心がけによって、スマホによる問題がだんだんと減っていくのが一番良いですが、どんなに駅などの公共の場での放送などで呼びかけても減っていかないのが現状なのです。なので機械、科学的手段を取るのも一つの方法だと思ひ、現実できるようなことを考えてみました。車にあるカーナビゲーションやテレビのように、

車が進んでいる時には、見られなくなるシステムもあります。そのような、システムをスマホに使えないでしょうか。歩き始めると自動的に作動しなくなるというアイデアはどうでしょうか。もう一つの問題点のスマホのゲームについては、「今、あなたは周りの人に迷惑をかけていませんか。」「今、本当にゲームをしなればいけない状況にありますか。」など、これも自動的にスマホに注意の配信をするのは良い手ではないでしょうか。そして、その忠告を受け入れたらポイントが入るという制度にすれば、ゲーム好きの人はポイントも好きだと思ったのでスマホのゲームによるトラブルは減少していくのではないかと思います。このように、大きなことをいきなり改善するのは難しいです。けれども、今のこのようなままの社会では人間としてとても悲しいことであり、スマホはせっかく便利なものであるのに人間が欠点を見つけてしまうことも、とても悲しいことです。だから、少しずつ、一人一人が心がけて明るい気持ちにしていく必要があるとぼくは考えました。そのため、現在、力を入れていくアナウンスなどをもっとも強化していく必要があると思ひました。また、ぼくたちが大人になったころには、このようなことが改善されていて、困ったり、気にすることのない社会になっていたら良いとぼくは思ひました。そして、ぼくは周りの人から信頼してもらえる大人になり、その時の子どもたちが「こんな大人になりたい。」と思ってくれば、ずっとそれがくり返されて、とても長く、明るい社会にできると思ひます。



★ ★
優秀賞

いじめられる側もする側も

南池袋小学校
6年生 びるまち あやか
美留町 彩日さん

他人から悪口を言われる、暴力を受ける、避けられるということは、全ていじめで、犯罪です。しかし、いじている人は、きっと自分でも辛いのではないのでしょうか。「相手は、動きがおそいからいじめ。」「弱いし、自分と違うからいじめ。」と言う人がいます。確かに、自分の苦手としている人もいます。でも、その人には、良いところだってたくさんあります。悪いところだけ見ないで良いところを見つけることが「人間」としての仕事なのだと思います。いじめている人に対して、「気持ちがあると思います。だから、「もし自分がいじめられたら」と怖くていじめをしていても、きっと辛いのだと思います。私は、いじめを受ける人もいじめをする人も大切にしてほしいです。いじめや差別なんかしていないで、人の良いところを見つけられれば、誰も損なんてしません。少し苦手な人がいたら、その人に直接言うことはできなくても、まずはその人の良いところを見つける、ということをしてほしいです。これは、いじめを受ける人といじめをする人の人権を守り、いじめを無くすことにつながります。では、私たちには、何ができるのでしょうか。例えば、いじめを見つけて止めに行くことです。いじめを見つけたら近くの大人や友達に相談することが大切です。また、路上生活者を差別、特別扱いしないこともそうです。弱くても、みなさんと同じ人間です。このように、人を差別しない、差別を許さない、ということをやめてほしいです。差別を無くす努力は、色にも関係しています。肌色という色は、今では「パールオレンジ」と呼ばれています。これは、黒人と私たちの差別を無くすため

です。世界中の肌の色は一つだけではありません。クラスでも、生活の中でも、このように努力することが必要だと思います。私が、本で読んだ言葉に、「相手がいじめられていると感じたら、それはいじめだ。」というものがありました。最初は、他の人から見ているかどうかが決まると思っていたので少し疑問に思いました。しかし、私はそれを実体験をしたので、意味が分かるようになりました。班で給食を食べていると、その時は楽しく話していました。しかし、ある一人の子が急に泣き出してしまったのです。どうしたのか理由を聞くと、「自分に変なあだ名を付けないでほしい。」と言っていました。そのあだ名で呼んでいた人は、まさか嫌な気持ちになるとは思っていなかったようで、とても困っていました。このように、「相手にとつらいいじめ」ということがあります。なので、このような細かいところにも気を使うことが大切です。なのでこれからは、人の良いところを見つけられて、いじめをしている人がいたら積極的に止める人になれるよう頑張ります。さらに、「自分にとっては軽い気持ちだけれど相手にとってはいじめ」が起こらないために細かいところに気を配れるようになってほしいです。これを世界中の人ができれば、いじめはかなり減ると思います。これらの事を活かして、私は絶対にいじめをしない、見かけたら親や先生たちに言うようにします。全員がこれをできれば、いじめや差別は無くなります。

★ ★
優秀賞

「他の国の人を受け入れる」

池袋中学校
2年生 かなざし こうた
金指 功汰さん



「他の国の人を受け入れる」ということは他文化を理解し、コミュニケーションをとることだと思ひます。僕が一年生の時、ネパールから来た人が同じクラスにやってきました。その人は、日本語を話すことができなかったで誰の力も借りずに楽しく過ごしていくことは極めて難しかった。僕は、その人に積極的に話しかけた。なぜなら、僕は友達を作るのが大好きだし、その人が少しでも楽しく学校生活を送って欲しいと思ったからだ。最初は、自分の知らない人が多いことに緊張していた。また、誰かに心を開くことができなかったし、恥ずかしいという思いが強かった。僕は、四年生の時にドイツに行ったことがある。ドイツのデュッセルドルフという日本人が多く住んでいる町だった。デュッセルドルフではサッカーのスクールや学校に通った。ドイツ語は分からなかったが、ジェスチャーでなんとかなるだろうと思っていた。言葉が分からなくても大丈夫だろうと、甘い考えをしていたのだ。実際、そんな甘くはなかった。ジェスチャーで少しは理解することができたが、一人で楽しく過ごすことはとうていできなかった。しかし、現地に住んでいる日本人がやさしく助けてくれた。先生やコーチが教えてくれることを日本語で伝えてくれたり、僕をいじめてくるドイツ人から僕を守ってくれたり、大変お世話になった。そこで、僕は自分のことを理解してくれる人がどれだけ重要かを知った。その経験を生かし、まずは学校のことについて丁寧に教えてあげた。例えば、学校の規則や教室の場所、先生の紹介などだ。英語でコミュニケーションを

